# 本物との出会いを大切にした総合的な学習の創造
## 山形県からのおくりもの　～もっと優しく、もっと賢い子どもたちをめざして～

# A new approach of integrated study that adopted the encounter of students with authentic events

中島　明日香※
Asuka NAKASHIMA

**Abstract**

Students of Hotarugaike elementary school have been interested in Hanagasa-Odori (traditional dance in Yamagata prefecture), and wanted to dance beautifully in groups. Fortunately, students got the opportunity to learn directly the authentic Hanagasa-Odori from some alumnus of Yamagata prefecture. They experienced the necessity of gentle mind and wise heart in order to synchronize the Hanagasa-Odori each other. Furthermore, students got the opportunity to taste various fruits special to Yamagata prefecture, cherry, pear, grape, and so on, sent directly from Yamagata prefecture. Students learned process of farm works and pleasure of harvest. It is clear that various stimulation from Yamagata prefecture, in other words "gifts", brought the excellent impacts not only to the integrated study, but also to the physical education and foot education in our school. The article deals mainly with the mental growth of students during two-year project.

**Keyword**

elementary school education, the Period of Integrated Study, encounter, Hanagasa-odori Dance, Yamagata prefecture

**要旨**

本校の４年生の学年目標「もっと優しく、もっと賢い　４年生！」を実現するための取り組みの一つとして、花笠踊りに挑戦した。山形県人会の方に本物の花笠踊りを教えていただき、練習を重ねる中で、学年が一つになるために大切なことを学んでいった。また、子どもたち一人ひとりが山形県に興味を持ち、図書館の本で調べ、まとめた。さらに、山形県庁から果物や米といった農作物の提供を受けて美味しさを学び、それらがどのように作られているのかという農家の方の工夫や努力についても県庁からの出前授業を通して学んだことで、自分が調べたことと体験とを結びつけることもできた。

このように山形県からのいくつもの「おくりもの」を通して、山形県を基盤にして一つのことを追求し、多角的に学び、知識を積み重ねていく探究学習の楽しさを味わうことができた。また、本物と出会うという貴重な体験を通して、子どもたちの学ぶ意欲が高まり、学校で伝えること以上の成果を得ることができた。

**キーワード**

小学校教育、総合的な学習の時間、出会い、花笠踊り、山形県

※大阪府豊中市立螢池小学校教諭

## １．はじめに

本校は、大阪府豊中市の北部の住宅地にある小学校である。すべての子どもたちに、考える力・つながる力・やりぬく力を付けられるよう、人権教育部と学力保障部を両輪として研究を進めている。特に総合的な学習の時間は、人権総合学習として行い、「表現活動」と「人との出会い」を大切にしている。「表現活動」は、自分の気持ちを出し合い、子どもたちがつながり合う場になるように。また、「人との出会い」は、自分をふりかえって自分と周りの人との関係を考えたり、自分の生き方を考えさせたりするために、全学年で意識して取り組んでいる。

近年、人との繋がりの希薄さが叫ばれているが、本校の子どもたちの様子を見ても、気になる環境の中に生活している現実がある。一緒に住んでいる父は実の父親ではない、兄弟姉妹と親が違うという子どもたちが少なからずいる。そのような環境の中で、自分のことを大切にしてもらえないと感じたり、人のことを信じていいのかなと疑心暗鬼になったり、自分の存在に自信を持てなかったりして、自分を苦しめたりする現実があるように思う。全国的に子どもたちの不登校件数も増え続け、大人になって引きこもっている人の中には、小中学生の頃に不登校経験のある人が多いという現実を聞くと、小学校時代に人とのつながりの心地よさを感じ、「人って信じて良いんだな」と思わせる機会を作ることはとても大切なことだと思う。

私はできるだけ多くの子が、私自身との関わりの中でも人とのつながりのよさを感じてくれるようにと心がけながら子どもたちに接するようにしている。しかし、子どもたちが生きていく場は学校だけではなく、家庭や地域社会にある。学校を卒業すれば、社会の一員として生活していくことになる。学校で感じた心地よさは、学校だけのものだったということにならないように、どんな生活環境にある子どもたちとも、地域や社会の人たちとの素敵な出会いの場を授業の中で作っていくことが重要であると考える。

また最近では、たくさんの情報を子どもたちが簡単に得られるようになった。様々な情報が善し悪しに関係なく注がれる今、得られた情報を取捨選択する力を養うためには、子どもの頃から本物の人・コト・物に出会う喜びと感動を得る経験をすることが大切であると考える。

ここでは、２年間にわたって、子どもたちが本物と出会いながら学校行事や学習に取り組む様子と、その取り組みの中で子どもたちが学び、成長したことについて述べる。

## ２．子どもたちの姿

４年生で初めて出会った２クラス６３人の子どもたちは、それまでの３年間で転出入もあまりなく、人間関係はある程度固定化されていると思わせるような雰囲気のある学年であった。同じクラスの全盲の児童Ａさんに対して、ごく自然に関われる優しさが一部の子にはあった。休み時間に廊下をじゃれあいながら歩いていても、階段のところにさしかかると、ふとそのじゃれあいをやめ、「階段な～！」とサポートする姿があった。

その一方で、「この子はこういう子なんだ」というレッテルを張り合い、「３年生でもこんなことがあったし…」と過去のことを出しながら、もめている集団があった。「友だちがにらんでくる…」と勝手に思ったり、寂しそうに「どうせ私のこと、嫌いなんでしょ…」と決めつけたりして、友だち関係に自信を持てない子どもたちの姿が気になった。また、家庭環境が厳しく、母親がいないことで寂しい思いをしていたり、父親がいないことに対してあえて強がって見せたりしている子どももいた。また、学習が一気に難しくなり、今まではみんなと同じようにできていると感じていたのに、学力差を感じ始め、できない自分に対する劣等感からイライラがつのり、自分の気持ちをコントロールできなくて叫んだり授業を抜け出したりしてしまう子どももいた。中学受験を目指して、遅くまで塾に通い詰め、しんどい思いと闘っている姿もあった。本当は、みんなと気持ちよく学校生活を送りたいのに、それができない現実を子どもたちの中から感じることが多々あった。

学年みんなが、友だちに対する優しさをもっともって欲しい。学習だけでなく、学校生活を上手

く送ることができるように、そして、いろいろと考えながら行動できる子どもになって欲しいという思いをこめて、４年生の学年目標を「もっと優しく、もっと賢い４年生に！」として１年間掲示し、学年みんなで同じ方向を向き、同じ願いを持って意識しながら取り組みを進めていった。

４年生の学年目標

### ３．私と山形県との出会い

私は熊本県で生まれ、三重県で育った。東北地方に全く縁のなかった私が、大学時代に山形県出身の恩師と出会うことで、それまで知ることのなかった山形県のことを知ることができた。また、山形県を少し身近に感じ、興味深く思える経験もしてきた。さらに、小学校教員になった年、着任した小学校の職員室に１つの花笠があった。運動会の時期にこの鮮やかな花笠がクラスの人数分揃っていたらきれいだろうなと思い、いつかやってみたいと思っていた。転勤して本校に赴任して４年生の担任になった年、花笠踊りに取り組みたいと思った。４年生は、社会科の学習で都道府県を学び、音楽科の学習で民謡を学ぶ。その中に、花笠音頭も含まれている。だからこそ、他の教科の学びとの繋がりを考えても、４年生で花笠踊りに取り組むことはぴったりだと感じた。

「本物の花笠踊りを体感したい！」と思い、毎年８月に行われている山形県の「花笠まつり」に参加した。何百人もの人が一糸乱れずに一体となって踊る姿に感動し、祭りを楽しむと同時に、私もあの中の一人として踊ったら気持ちが良いだろうなという思いになった。どうして、あのような素晴らしい演舞ができるのかと考えた時、自分の都合だけで動かずに、相手のことも考えながら動いているからだということに気づいた。それは、学年で大事にしようとしていた、相手のことにまで気持ちを向ける優しさと、相手と自分の都合の折り合いをつける賢さがないと成り立たないのではないかと思った。花笠踊りは、まさに４年生の子どもたちとの学年目標と繋がっているように感じた。大阪で花笠踊りを行い、子どもたち自身に友だちと一体になっていく心地よさを感じさせ、保護者の方には学年が一つになっていくところを見てもらいたいと思い、花笠踊りに取り組む方針を決めた。

この取り組みの原点さえも、まさに私自身の人との出会いと、本物に触れることから得られた感動であると言える。

### ４．本物に出会うことの良さ

私が花笠まつりに参加して感動したように、本物に出会うことは、子どもたちにとっても以下のような大きな効果があると考えられる。

・他者の生き方にふれることができる
・今まで知らなかった新しいことに対して、憧れを感じることができる
・自分もやってみたいとモチベーションが上がり、目標となる

そこで、山形県大阪事務所を訪ね、大阪で花笠踊りを教えてくださる方を紹介していただいた。子どもたちには、私が出会った花笠踊りのことについてビデオや写真、本物の花笠を見せながら話し、もっと優しくもっと賢くなるために取り組んでみないかと提案をした。

【取り組むことが決まった後の子どもたちの意見】
・山形県の花笠をおどれるのがうれしい。自分たちで一生けん命花笠を作って、一生けん命おどりたいです。お家の人が、「みんながそろっている」や「かっこいいなぁ」と思ってもらえるようにおどりたい。
・一回テレビで見たことがあるから私もおどってみたいなぁと思っていました。だからおどるって聞いて、早く自分がおどりたいと思いました。
・山形県の花笠をおどっている人が、何百人ものすごい人数で、バラバラにならずにおどっているから、４年生全員でバラバラにならずにおどりたいと思いました。

・山形の花笠おどりは「聞いて、見て、笑顔になれる歌だなぁ」と思いました。運動会でおどれることになって、「やったー！おどれるんだ！」と思いました。おどるのはむずかしそうだけど、「みんなが笑顔になってくれたらいいな」と思いました。

前向きな意見が多く出されたのは、本物に魅力があったからだと思う。やるかどうかを決める時、「ぼくはできるかどうかわからないから嫌」と言う子どもが一人いた。その子に対して、「今までもできないと思ったことがあったけど、最後はできるようになったよ」、「みんなでやったら楽しいよ！」、「できないところは一緒に練習するから！」という声が上がり、その子どももうなずいて最終的には全員が納得して取り組むことに決まり、山形県人会から花笠踊りの先生が来てくださるのを、子どもたちみんなが心待ちにするようになった。

### ５．山形県からのおくりもの①

山形県人会の花笠踊りの先生に来ていただいて、本物の花笠踊りを見せてもらい、子どもたちは体得しようと紙でできた練習用の笠を使って、一生懸命練習していた。初めはぎこちなかった子どもたちも、１時間ほど練習することで踊れるようになり、一人の子が「本番まで一生懸命練習するので、本番も見に来てください」と思いを伝えて、山形県人会の方と別れた。

山形県人会の方による指導

山形県人会の方による指導

毎日練習をする子どもたちの姿は、真剣そのものであった。休み時間に、教室で円陣を作って踊る子、家でもクッションやまくらを持って練習に励む子もいた。Ａさんもひたすら音を覚え、先生や友だちから手取り足取り動きを教えてもらって体得し、みんなと同じように踊れるようになった。動きの練習とともに、図工の時間には花笠作りにも取り組んだ。菅笠に、鈴をつけ、お花紙で作った花を付け、キラキラなテープや「ほたるっ子花笠」と書いた一人ひとりの札を付けた。少しずつ出来上がっていく自分の花笠に、愛着を持ち喜んでいた。

### ６．学年の動きが一つになるために

個々の踊りが大体そろってきたところで、行進しながら踊る花笠踊りの隊形を、私はどんどんと変えていった。子どもたちは練習を重ね、踊りながら上手に隊形を変えていけるようになった。直線から小さな円陣を作り、学年の大きな円陣を作り、二重円を作る。それを子どもたちの前で指導していて、どんどんと上手になっていくことに喜びを感じつつも、Ａさんも含めてどうしてあんなに上手く移動できるのだろうかと不思議に思うようになった。そこで、それまで全体の前に立って指導していたが、子どもたちの中に入り、近くで指導してみた。すると、隊形移動をする際に子どもたちなりの考えがちりばめられていることに気づいた。

後ろの子どもが、「もう少し右！」「そうそう！」などと声をかけて動いていたり、Ａさんや近くの友だちの動きに合わせて自分が歩く足の歩幅や角

度をその時々に微妙に調整したりして、全体としての隊形がきれいに保つように工夫していた。これこそ、学年が一つになることであり、私が目指していた「もっと優しく、もっと賢い」姿だと感じた。

運動会での発表

【本番を終えた子どもたちの感想】

・初めて花笠音頭を教えてもらった時は、すごくむずかしくて「ちゃんと本番でおどれるのかなぁ」と心配だったのですが、ていねいに教えてもらったので、すごくうれしかったです。４年生全員で円になっておどるときに、山形の人が「(見本になるために) 前に行ってあげようか」と聞いてくださってうれしかったです。

・中島先生に運動会でおどってみようと学年集会の時に言われました。みんなやろうと立っているのに、ぼくだけは立てませんでした。けど、みんなが花笠おどってみようと言ってくれたので、立てました。おどる先生が来ました。プロのおどりの人みたいで、それを見ていたらぼくもやりたいと思いました。

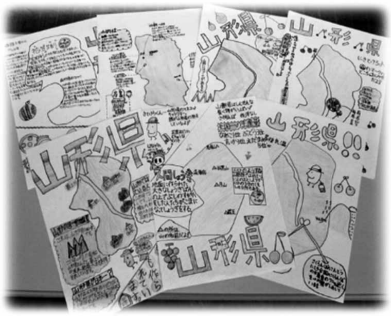
・９月に花笠音頭を教えてもらった時は、むずかしそうと思いました。でも、だんだん練習していると楽しくなってきました。あと花笠を教えてくれた人が「自分のことだけじゃなくて、人のことも考えることが大切」と言っていたので、そのことは花笠だけじゃないと思いました。

・「花笠」というおどりと、そのすごさを教えてもらった。日々の練習を積み重ねて、みごと本番に大成功しました。「花笠」の楽しさや素晴らしさを感じました。「一つになるにはどうすればいいか」ということを考えながらおどることができました。

地域行事での発表

**７．山形県からのおくりもの②**

花笠踊りに取り組む中で、子どもたちは心地よい達成感や満足感などを感じ、山形県に親しみを持つことができるようになった。社会科の学習で都道府県名を一つずつ覚えていった時も、覚えることの苦手な子が「俺、山形県だけは分かる！」と得意気だった。「山形県調べ」を行い、たくさんの資料の中から必要な情報を選び取り、読み手のことを考えてまとめる工夫をした。それは、５年生での「世界の国調べ」に繋がった。



世界の国調べをした子どもたちの作品

おいしい山形推進機構主催の山形県産農作物食育活動支援事業にも参加し、２年間にわたって５種類の果物と米と花を送っていただくことができた。子どもたちは、「山形県調べ」で学んだ有名な農作物の本物の味を知ることができ、とても喜んでいた。それ以来、「スーパーで山形のリンゴ売っていた！」、「山形県のラ・フランスをもう一度食べたくて買いに行った」と教えてくれるなど、産地について興味を持つ子どもが出てきた。

また、５年生では社会科で米作りを学ぶ際、教科書に庄内平野での新しい米の品種である「つや姫」作りの様子が紹介されており、このことも前年度の「山形県調べ」と繋がった。実際に「つや姫」も送っていただいて、家庭科で調理実習する際に炊き、味わいながら農業に対する理解を深めることもできた。さらに、５年生の終わり頃には山形県庁から農業についての出前授業に来ていただき、２年間おいしくいただいた果物や米がどのようにして作られているのかということを詳しく教えていただいた。話の中には、子どもたちが調べていた内容もあり、それまでのすべての学びが繋がった。

山形県庁からの出前授業

出前授業に来ていただくことが決まった時、何かお礼ができないかと子どもたちに相談したところ、「感想を言う」、「歌を届ける」という意見が出される中、「山形県の人と一緒に花笠を踊ろう！自分の県の踊りを大阪で踊れたら嬉しいと思う」という意見が出た。その意見を聞いた子どもたちは「やったー！」「良いなぁ！」と心から賛成したようで、次の日から１年以上前に作った花笠をほぼ全員が学校へ持って来だした。再び花笠踊りをする機会が得られたことに私は感無量だったし、自分が作った花笠を子どもたちがずっと大事にしていたことも分かり、とても嬉しかった。何よりも、子どもたちが山形から来る人のことを考え、喜んでもらおうと考えをめぐらし、花笠踊りを選択したことが素晴らしいと思った。

## ８．子どもたちが学んだこと

子どもたちは、大阪から遠く離れた山形県からのいくつもの“おくりもの”を通して、人として成長するにあたって大切なものを得ることができた。花笠踊りを通して、人のことを考える優しさと、相手のことも併せて考えられる賢さ。一つになることの心地よさ。初めて出会う花笠踊りの先生たちから、自分とは違う人のかっこよさや、人の温かさ。本場の果物の味覚と、それを作る人の苦労や工夫。本で知ったことを実際に体験して学ぶこともできた。そして、人との出会いによって、新しい世界を知り、人の気持ちに思いを馳せるようになり、自分たちの頑張りやアイデアから相手を喜ばせようという気持ちも高まったように思う。

【出前授業を終えての感想】

・山形県からの出前授業で、おいしい果物づくりでの工夫やペロリンのことを教えてもらって、さらに山形のことを知れた。山形県の農家の人の苦労を知って、すごく果物づくりにこだわっていると思った。
・社会科の学習で一度したことのあるお米のことを、さらにくわしく山形県ならではの工夫などを知れたので良かった。山形県の果物のおいしさのウラには、いろいろな工夫や、農家の方々の苦労が知れてとてもありがたく思った。
・山形県の人に出前授業をしてもらい、最後に花笠をいっしょにおどってくれたのでうれしかった。歌も聞いてくれて、泣いている人がいたので良かった。

## ９．おわりに

この２年間の総合的な学習の時間を核にした教科横断的な学習活動の取り組みの中で、山形県をベースに一つのことを追求し、多角的に学び、新しい知識を追求、探究していくことの楽しさを子どもたちは感じてくれたようだ。いくつもの山形県からの本物の“おくりもの”によって今まで知らなかった世界を知り、そこに暮らす人へ思いを馳せ、教科書に書かれてあること以上に人の気持ちなどを想像することができるようになった。

私自身が学び、体験したことを子どもたちに社会科学習として伝えたとしても、今回ほど子どもたちに強いインパクトを与えることはできなかったと思う。本物と出会うことは、学校で伝える以上の成果が期待できると実感した。本物と出会った子どもたちは、初めて出会う人にも温かさを感じ、「人って親切にしてくれる」、「人って信じて良いんだ」という思いを強く感じてくれたことだろう。これからも、公教育の授業の場でこそ、より良い出会いと体験を作っていけるように総合的な学習の時間を中心にして私も働きかけていきたい。

山形県の方と踊った花笠踊り